

核兵器をお守りだと主張するリーダーの皆さんへ

立花彩乃

あなたが日々の暮らしの中で幸せを感じる時はいつですか。あなたにとって平和とは何ですか。

私は日本で学生をしています。そんな私の日常生活は、幸せで溢れていると日々感じます。毎日学校に通うことができること。友人とお弁当を食べられること。帰る家があって、温かい家族の「おかえり」を聞くことができること。年に一度、誕生日を迎えることができること。何も特別なことではないように感じるかもしれません。

しかし、このことは全ての人にとって当たり前なことでは決してありません。この小さな幸せは、私が戦争をしていない国で生活しているからこそ感じるができる幸せだと思います。このような小さな幸せは人類誰しもに平等に与えられているものであったはずです。それでは、なぜ小さな幸せを感じるができない人がいるのでしょうか。

それは、人々の小さな幸せを犠牲にするリーダーたちがいるからです。私は何の変哲もないどこにでもいる学生です。しかしながら、核兵器を自国の安全保障のために所持していると主張しているリーダーの皆さん、人々の小さな幸せを破壊するパワーを持っているリーダーの皆さんが忘れ去ってしまっているであろう、平和とはどのようなものなのかが私には分かるような気がするのです。

そもそも戦争に対してどのようなイメージを抱いていますか。私は大学で所属しているゼミナールで今年の6月末に行われた広島にフィールドワークにメンバーとして参加し、広島平和記念資料館を訪れていたインバウンド観光客の方にインタビューする機会がありました。その際に、「資料館を訪れる前までは戦争に対してロマンチックなイメージを抱いていたが、被爆体験者の言葉に触れて戦争の悲惨さを学んだ」という声でした。

人生のほとんどを世界唯一の被爆国である日本で過ごしてきた私にとって、戦争に対して一度も「ロマンチックさ」を見いだしたことはありません。しかし、その人が育った環境や受けた教育によって歴史的背景も異なることへの理解が深まった、新鮮な意見でした。私なりにロマンチックさを感じているときのことを想像してみた際に、大好きな趣味に没頭しているときの自分の姿との共通点を見いだしました。それは、趣味に夢中になっているときは周囲の人からどのようなことを言われても聞き入れられない点です。

人は、一度物事に熱中してしまうとある種のゾーンのようなものに飲み込まれてしまうと思います。これと似たことが戦争に対しても言えるのではないだろうか、戦争を始めてしまったらその「ロマンチックさ」に乗っ取られてしまうのではないかと考えることができると思います。さまざまなおもしろい理由や目的の背後で、皆さんは戦争のロマンチックさに乗っ取られてしまっていないでしょうか。

私は毎日のように目にするロシアとウクライナやガザ地区とイスラエルの戦争の映像を胸を痛めながら観ています。そしてその映像を、画面を通して観ることしかできない無力さに押しつぶされてしまいそうです。

私がこのような感情になる理由は、自分の人生において大切な人たちに、映像の中の人たちを重ね合わせているからだと考えます。誰しもにかけがえのない人がいるはずです。愛する家族や親しい友人、尊敬するアーティストなどです。そのような人が画面の向こう側の人たちにもいたはずですが、残念ながら現在は分かりません。なぜなら、リーダーの皆さんが始めてしまった戦争によって日々、それらのかけがえのない命は奪われ続けているからです。

私たち個人は、人を殺害した際にはその重さは違えど処罰を受けます。それにもかかわらず、国単位でリーダーの皆さんが人の命を奪った場合だと処罰を受けないのはなぜなのでしょう。処罰を受けなければ命を奪うことは許されるのでしょうか。核兵器を保持している皆さんは、一瞬にして相手のかけがえのない人を奪う準備が整ってしまっているのです。その重みがあなた方の発言にはあるのです。一度あなたにとってのかけがえのない人に置き換えて考えると、あなたの手元にお守りのように所持している核兵器への見方が変化するのではないかと思います。

核兵器を保有している国の皆さんが多く口にする意見、それは万が一に備えてという言葉です。万が一の事態は一体なぜ起きてしまうのかについて考えたことはありますか。それは万が一に備えて核兵器を手放す勇気のないリーダーの皆さんが一人でもいるからです。

核兵器は「存在する限りは使われる」※1。そもそも存在しなければ、核兵器が他の国によって使用される心配もありません。この事実が明らかであるにもかかわらず、核兵器を手放さない行為のどこが国の安全保障のためになるのでしょうか。核兵器を自分たちも持っていることをアピールして、一時的なかりそめの「安全保障」を語るより、平和について対話をする場を設けることは難しいでしょうか。

私自身は政治学の専門家でも最新の軍事的な知見をもっているわけではありません。ところが、人々と争う前に対話の場を設けることによって理想の平和に近づくことができることを肌身をもって知っています。核兵器よりも先に対話という正しい選択ができることを、私よりももっとも教養のある皆さんには期待しています。

最後に。私自身、平和とは何かについて考える活動に参加していく中で、「平和」という言葉の壮大さに悩まされることが多々ありました。「世界平和」や地球上の「全人類」を、平和という単語から無意識のうちに連想してしまっていたからでしょう。

まずは、自分が小さな幸せを感じ続けるためにはどのような世の中であるべきか——それについて立ち止まって考え始めることを提案します。そして一旦考え始めると、想像していたよりも「小さな幸せ」「私だけの幸せ」はあちこちに溢れていることに気づいていただけるのではないのでしょうか。この問いについて考えることが平和をもっと身近に、自分事として捉えるきっかけになるかもしれません。

私たち人間は、忘れてしまう生き物です。日々のありふれた生活が、幸せで溢れていることでさえ忘れてしまいます。あなたにとっての小さな幸せを日々かみしめながら生きていくことで理想の平和像に近づいていけると信じています。そして、平和について毎日自身と内的対話をしていけば、核をお守りになると信じているその認識がどのようなリスクを孕んでいるのかは、一目瞭然だと思えます。

参考文献

※1 核兵器廃絶長崎連絡協議会/長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)